同志社女子大学生活科学　*Vol*. 49，28～41（2015）

≪研究ノート≫

オランダにおけるドールハウスに示された日本の屏風

――アムステルダム国立美術館所蔵のドールハウスの紹介――

The Japansese Screens in the Netherlands Dollhouse

――The introduction of dollhouse in the Rijks Museum――

赤　澤　真　理　　兼　田　美　咲*　　楊　　昱**
（Mari Akazawa）　（Misaki Kaneda）　（Yang Yu）

Abstract： This paper introduces two dollhouses in the collection of the RijksMuseum. They are composed of various rooms including 1) loft, 2) Linen room, 3) Nursing room, 4) The Lying-in room, 5) salon, 6) kitchen. Each room in the dollhouse as well as their spatial relations are based in the real houses at the time. For example, the upper loft and the linen room are located under the roof in reality. In the center of the dollhouse are the salon and The Lying-in room. The salon was used as a public space mainly for women, which was originated in France. On the other hand, The Lying-in room was considered important because as the role of the women, giving birth wa still a dangerous situation for them at the time. These two dollhouses expressed the Oriental Interest, exemplified in the lacquer tea table, china porcelains, gold foil screens, etc. Therefore, these dollhouse were important materials to understand the Oriental Interest in Netherlands.

Key words：Dollhouse, Folding screens, Oriental Interest, Netherlands, History of Housing

1. はじめに

ヨーロッパにおける富裕層によって製作されたドールハウスは，当時の住宅の間取り・家具・家庭用具等，現代では失われた生活様式を理解する上で貴重な史料である[1)]。本稿は，アムステルダム国立美術館に所蔵される2つのドールハウスを紹介する[2)]。これらのドールハウスは，オランダの住居の様相と暮らし方を示すとともに，中国や日本製を模倣したと考えられる陶磁器・漆テーブル，日本のミニチュアの屏風が立てられていることに特徴がある。

17世紀のヨーロッパには日本の屏風が伝来した。近年，オーストリア，グラーツのエッゲンベルク城に，17世紀制作の大坂図屏風が発見された[3)]。本屏風は，慶長5年（1660）から延宝8年（1680）にオランダ商人が購入し，1607年から1614年頃（慶長年間）に制作されたと推定されている。屏風は切り離され，壁に直接貼られ，「インドの間」として今日まで伝わった。

遡って，天正10年（1582）に長崎からローマ法王及びスペイン国王のもとに遣わされた天正遣欧使節の贈り物に，「安土城図」があった[4)]。

いっぽう，オランダのドールハウスに示された日本の屏風は，従来注目がなされてこなかった。2013年～2015年度本学生活科学部人間生活学科応用演習Ⅱ（住文化）において，アムステルダム国立美術館所蔵のドールハウスの英文図録を講読した。本稿では，これを研究ノートとして紹介したい[5)]。

同志社女子大学生活科学部
*同志社女子大学生活科学部　2014年度卒業生
**コロンビア大学大学院博士課程美術史学考古学専攻

2. ヨーロッパにおけるドールハウスの変遷

本論文が対象とするヨーロッパにおけるドールハウスは，17 世紀のドイツに普及し，貴族の子女達の教育玩具として用いられた。現存最古のドールハウスは，1558 年にバイエルン王国の侯爵アルブレヒト 5 世が娘のために製作したものである。

2-1. ドールハウスの形態

ドールハウスの形態は，以下のように大別される[6]。

①箱型（ドイツ）

四角い木箱を，上部と手前の面を切り除いて製作した。特にドイツにはキッチンや商店などが多い。間に壁を挟み，2 部屋に分けられているものもある。また，正面の方が間口が広く，真上からみると台形にみえる変形箱型，壁が 2 面しかない型もある。正面に向かって広がった舞台型もある。

②戸棚型

・キャビネット型（オランダ）

オランダ初期のドールハウスに代表される。小物や宝石を飾ることから，ドールハウスに発展した。

・カップボード型（ドイツ・イギリス）

実用品を入れる戸棚を利用して作られた。装飾は少なく，前面にガラスが入る。ドイツ・イギリス等で多い。

③家型（イギリス）

イギリスに最も多く，家の模型と同じで，扉を開閉できる。イギリスでは，18・19 世紀にかけて，本職の建具師や大工が製作したため，家の型を示すようになった。

2-2. ヨーロッパ各国におけるドールハウスの特徴

・ドイツ

ヨーロッパの中でも，ドイツは最も古くからドールハウスが製作された。記録上の最古として，1558 年にドイツ南部ババリア地方の侯爵アルブレヒト 5 世が娘に贈ったドールハウスがある。侯爵は，自身の屋敷を縮小したものを，実際に製作した職人各々に担当させて製作した。記録によれば，17 の扉と 63 の窓を持つ 4 階建ての家で，金糸のタペストリーが壁面を飾る舞踏室をはじめ，当時としてはモダンな浴室やワインセラーがあった。侯爵はドールハウスを通して，娘に部屋の用途やふるまいなどを教えたという。現存最古のドールハウスは，国立ゲルマン民族博物館所蔵，1611 年のドールハウスである。ドイツのドールハウスは他国と比較し，キッチン用品・設備が充実し，子供の教育玩具として用いられたとされる。

・オランダ

ドイツと同様に，オランダもドールハウスが古くから製作された。1550 年頃からイタリア・スペイン・ポルトガルが勢力を競う時代から，オランダとイギリスが台頭する。首都アムステルダムは国際交易都市であった。当時のアムステルダムの富裕層は絵画をはじめ，家具，磁器の収集に熱心であった。

本稿が紹介するアムステルダム国立博物館に所蔵されるキャビネット型のドールハウスの一つは，1686 年から 1705 年に製作された。アムステルダムの全盛期にある。後述するが，ドールハウスの食器棚に飾られた磁器は，中国や日本で製作された。1602 年にジャワ島にオランダ東インド会社が設立され，1609 年に長崎の平戸に商館が建てられた。オランダは長崎の出島を通して，日本の交易国となる。

オランダは，ドイツと同様に前面に建築の壁がなく，ドアのあるキャビネットハウスにコレクションを並べ，保管した。キャビネットには繊細な装飾が施された。

・イギリス

イギリスはオランダに引き続き，インドを中心とするアジアに勢力を拡げた。イギリスのドールハウスは，ドイツとは異なり，扉式の建築の壁が付いている。イギリスのドールハウスの愛好家に建築家が多かったことに起因するとされる。トーマス・チッペンデールもその一人である。

18 世紀におけるイギリスの産業革命は，ドールハウスにも影響を与え，玩具メーカーによってドールハウスが製作された。とりわけウィンザー城に所蔵されるメアリー女王のドールハウスは，エレベーター・蓄音機・台所設備等の近代設備が使われる[7]。建築家のサー・エドウィン・ランチェンズ（1869～1944 年）の発案による。

3. アムステルダム国立美術館所蔵ドールハウス

ここで，アムステルダム国立美術館所蔵ドールハウスを紹介していきたい[8]。同館出版の英文図録を翻訳し，その後に考察を加える。以下，翻訳文を示す。

17 世紀後半のドールハウスは，アムステルダムにおける数少ない商人と貴族階層である，裕福な女性のために製作された。外観のキャビネットから各部屋，家具まで全て現存するものは，3 つのみである。3 つのうち，2 つはアムステルダム国立美術館（Rijks）に展示されている。3 つ目，Petronella de la Court は，ユトレヒト中

央博物館に展示されている。

これらのドールハウスは，観賞用に制作されたもので，磁器，象牙あるいはグラス等の豪華な品が納められており，子供のためではなく，大人の女性のために造られた。ドールハウスの由緒は，「コレクターの飾り棚」にある。収集家の飾り棚は，華やかに装飾され，その中に美術品が置かれた。いっぽう，ドールハウスは，美術品の代わりに，家庭用品のミニチュアが置かれる。オランダでは，食器棚の形は家の形ではなく，飾り棚になっている。Petronella Oortman のドールハウスを描いた絵から，特別な品々は扉の裏に仕舞われ，さらにカーテンで隠されていることが分かる。

ドールハウスとその中の置物は様々な職人，画家・棚の職人・彫刻家・銀細工師・籠の職人・吹きガラスの職人等が工夫した。職人達は，注文主である女性の元で，製作に関与した可能性が高い。Petronella Oortman のドールハウスの内装には，建築家も参加したと推測される。

ドールハウスは，17 世紀の住宅の内装について，重要な情報を数多く提示してくれる。このドールハウスが基にした住宅は現存しないが，ミニチュアから当時の貴族だけではなく，台所の女中と洗濯婦などの衣裳も理解することができる。

3-1. The Doll's House of Petronella Oortman/Petronella Oortman のドールハウス

1）概要

Petronella Oortman（1656-1716）のドールハウスは，人々の熱狂の的にあった。このドールハウスは，制作費用がかかりすぎたということから，ピョートル大帝が注文を断ったという逸話すらあるほどである。

ドールハウスの棚は，一つの芸術品であり，表面は鼈甲細工と鏤刻のしろみから造られている。これはオランダにおいてごく稀な材料であるため，この職人は当時のフランスの宮廷に務めていた人物と考えられている。ドールハウスの棚の両側には，B と O という二文字の文字があり，これは夫婦である Johannes Brandt（1654-1731）と Petronella Oortman の名前の頭文字だと思われる。この符丁はドールハウスの他の箇所に，例えば，ホールの天井，ベッドの掛け布団，テーブルのナプキンなど様々な場所にある。

裕福な寡婦である Petronella Oortman とシルクの商人である Johannes Brandt は 1686 年に結婚し，アムステルダムの Warmoesstraat に暮らしていた。ドールハウスの棚は 1686 年から 1690 年の間に完成し，そして極めて本物に似ているミニチュアの内装は，15 年を要したと考えられる。このドールハウスは Petronella Oortman が 20,000 から 30,000 ギルダー程の大金を使ったといわれている。

このドールハウスの内容は，完成された間もなく画家 Jacob Appel の絵で忠実に描かれ，その後 18 世紀後半のカタログにも詳しく描写された。後に加えられたものは非常に少ないが，18 世紀に 2 カ所が変わったところがある。ホールの後ろの庭園がなくなったことと，現在のタピストリー室は，本来には喪に服するための場所であった。唯一残った人形は乳児の人形である。

1718 年にドイツの旅行者 Zacharias von Uffenbach がこのドールハウスを見学した際，彼が興味深い記事を遺している。彼によると，このドールハウスの機能は，何時間でも夢中になるような，驚きのショーケースであるとしている。

図 1　The Doll's House of Petronella Oortman

2）The Linen Room／リネン室（図 2）

アムステルダム式の急勾配な屋根の裏に，いくつかの屋根裏部屋がある。一つは外で洗濯やブリーチしてもらう亜麻布を預ける場所である。天井から吊り下げた棚に棒を置き，その上に濡れたシーツ，テーブルクロス，シャツ等を干す。このリネン室には，高級店のブランド品のナプキンもあり，B と O の頭文字がみえ，そのサイズもドールハウスに合わせて特別に造られたものと考えられる。

アイロン台には，やわらかな毛織が敷いてあり，その上に洗濯婦（現存しない）がアイロンをかけたと推測される。二つの熨斗には全て炭火が入っていた。黄銅で造られ，鉄底と木製の握り手が付いてあった。これは Petronella Oortman のドールハウスの特徴である。他の 17 世紀のドールハウスは，熨斗は銀で造られた。

アイロンをかけた後の洗濯物は，服トレーに置かれ，シーツやテーブルクロスは，リネン箪笥にしばらく置かれる。洗濯物を収納し，あるいは各部屋に運ぶ時，（ふたが有りと無し）リネンの籠を使っていた。右の壁に背もたれの高い長円形の籠（おしめ椅子）がかかっていた。引き出しの箪笥を利用する前に，乳母は暖炉の隣に座り，足を延ばしたままこの椅子を使って乳児の育乳をしたり，おしりを拭いたりしたとみられる。通常，この椅子は分娩室に置かれる。

リネン室の後ろには，女中達の寝室が二つある。その中に，花柄のカーテンがかかっていた箱の寝台の他に，椅子と便器があった。

3）The Peat and Provisions Loft／泥炭と糧食貯蔵室（図 3）

この貯蔵室は床と壁によって空間が分かれていた。一つのはしごが泥炭小屋につながり，泥炭と柴木が綺麗に格子の裏に積み上げられた。この重要な燃料は二つの籠で家の各所の暖炉に運ばれた。泥炭小屋の下に食品室があり，分離した壁の板に繊細な曲線の透かし彫りがあり，その形はドールハウスの外観の透かし彫りと似ている。長円形の窓の下にある棚の上に，食物の保存容器とねずみ捕りが置いてある。

その他に，この屋根裏部屋は，余ったテーブルや鏡等の物置き場として使用された。白い塗壁に平籠がかかってあり，その裏は刺繍の飾りがあった。はしごの隣には，余分な火鉢があった。この火鉢は育児室と分娩室で，おかゆを温める，濡れたナプキンと服を干すことに使われた。このため，火鉢の下に炭火が入っていた錫の鍋が付いており，その上に濡れたものが置いてあった。

夏の期間には，オランダの家でよく使用した足暖炉が収納された。ここにあるものは炭の鍋までついてある。糸車も 17 世紀の家の中において，小屋に収納されたものである。精密に回る黒檀な紡錘はミニチュアの職人の腕の見せどころである。

4）The Nursery／育児室（図 4）

贅沢に飾られたこの部屋には，育児室という機能を示

図 3　The Peat and Provisions Loft／泥炭と糧食貯蔵室

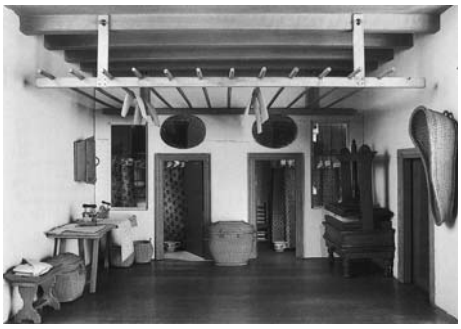

図 2　The Linen Room／リネン室

図 4　The Nursery／育児室

す物品はきわめて少ない。実は，ただ一つのカバー付きの揺りかごしかない。Jacob Appel によって描かれたドールハウスの絵によると，この部屋の中に子供の人形は 2 人で，うち 1 人は男の農民の膝に座っていたとみられる。その男は使用人か，女中の夫か不明である。

絵で飾った天井から柏木の子供ベッドの上に一つの天蓋が吊ってあり，丸いテントのような形で，黄色いシルクと淡い青い組紐から作られた。このようなベッドは四つ柱のベッドほど広くはなかったが，同じ黄色なシルクと青い組紐はゆりかご，テーブルクロスそして座布団などにも使われていた。17 世紀後期において，主要な部屋の内装は，全体を統一することが重要視された。

育児室の内装は，非常に豪華である。左のテーブルの上に金メッキの額縁の鏡がかかっている。同じ額縁を使った円形の絵画が両側の扉の上に飾ってある。後ろの壁にある下窓のシャッターが閉まると，裏側に金箔地のカラフルな花束が描いてある。上の窓は当時サッシュと呼ばれ木の板があり，それをシルクでカバーし，その上にオウムが描かれている。そのモデルは現存していない。

高い台の上にある胡桃の箪笥に子供の服が収納されている。現存しているのはパンツ 1 枚，寝巻き 1 枚，靴下 2 足だけである。

5）Salon／サロン（図 5）

17 世紀後半の住宅において，サロン「zaal」は，最も格式が高い部屋である。日常生活ではなく，接客のみに使われた。この部屋の内装と家具は，持ち主の富と地位をそのまま示している。

本ドールハウスのサロンには，床から天井まで Nicolaes Piemont によって描かれた絵が飾ってある。その絵は，連続した風景と，曇り空と鳥が描かれていた。それにより人々は，オランダとは異なる風景の中に立っているように感じる。しかし，その錯覚はたちまち，室内の巨大な暖炉と鏡，そして隅に置かれた折りたたみ式のテーブルや壁に沿って置かれた椅子らによってなくなる。暖炉には Willem van Royen によって描かれた，庭園のような背景に家禽がいる絵が飾ってある。夏の暖炉には，大きな花瓶の花の絵が飾ってある。同じような花とオウムの絵は，ティーテーブルに精細に描かれていた。テーブルの黒い生地は東洋の漆を見立て，スタンドには黒と金色の飾りを使用した。当時未だ普及してなかった喫茶の習慣は，東洋風のエキゾチックな特質として強調されたという。

サロンの機能に従って，椅子の飾りもドールハウスの椅子の中で最も豊富である。彫りと高い本ビロードの布張りで組紐と房飾りで装飾されている。

サロンは夜の娯楽のために使用された空間であり，音楽を演奏したり，ゲームをしたり，軽食を食べた。Appel によって描かれた絵に，2 つ座っている人形は簡単なテーブル（折りたたみ式のスタンドに上を載せる）でバックギャモン（ボードゲーム）とタバコパイプを嗜んでいる。訪問客が帰った後，そのテーブルは収納し，他の家具は壁に沿って，綺麗に片付けられる。

6）The Hall／玄関ホール（図 6）

17 世紀の住宅にある玄関ホールは広く，アーチがある狭い廊下と奥の階段につながる。このような配置はドールハウスの中にも現れるが，そこには階段がなかった。玄関ホールは，裕福な商人の家が接客する最初の部屋であるため，このドールハウスにみられるように，床に白いイタリアの大理石，黒い切石積みなど，豪華な材料が使われている。

図 5　Salon／サロン

図 6　The Hall／玄関ホール

白いスタッコの壁にある灰色のトーンの絵は，壁のくぼみ（ニッチ）や大理石の彫像，浮彫があるかのように描いている。このようなグリザイユ（灰色の濃淡による画）によって描かれた寓意像と擬人化の絵は，17 世紀末期の画家 Gerard de Lairesse によって描かれ，玄関ホールにふさわしいものである。このドールハウスの絵は，彼の学生である Cornelis Hoogsaat によって描かれたものと考えられる。天井に嵌められた絵画は彩色で，曙の女神が雲に乗っている。これは Johannes Voorhout の作品だと推測され，ほかに，産室とタペストリー室にも彼の作品がある。

アーチの下で奥にある二つの扉の上にもグリザイユがある。そこの天井に商人の守護神であるメリクリウスが描かれている。これは明らかにその上の空間と関連性がある。その上には，コントワーという，家のマスターが商務を行うオフィスがある。

この玄関ホールは，二つの円卓と繊細な彫刻があるベンチが飾ってある。Appel の絵画からアーチの奥に庭園があることが分かる。この庭園は別の箱で建てられ，玄関ホールの奥に付加された。1718 年の Von Uffenbach の記述によると，この庭園には本物の水が湧く噴水池が設けられたという。

7）The Lying-in Room／産室（図 7）

産室は，子供の出産のための部屋である。子供が無事に生まれたら，出産のために雇われた乳母が新生児を包み，母親を綺麗にしてから，訪問客を招待する場所である。

部屋の奥にくぼみがあり，その中にベッドが置かれた。すべて布張りの四柱式ベッドで，上掛けは刺繍入りであり，繊細で透明な亜麻糸のシーツと布団，枕，クッションとレース付きのカバーがある。ベッドの幔幕は赤の波紋の絹地であり，その端は赤と黄色い組紐とふさ飾りが縫ってある。同じような素材と縫い方はくぼみの幔幕，揺り籠のカバー，テーブルのカバー（白い綿の生地の下に），椅子のクッションに使われていた。全てのものは壁の赤ビロードと調和させ，統一感を作り出した。

揺り籠のほかに，出産部屋には，火鉢（カバー付き），リクライニング椅子，寒気を防ぐためのウールの格子模様の屏風が置いてある。リクライニング椅子の背もたれ，座面，肘掛けは全てソフトクッションが入れられた。その上に，少し寂しげだが，綺麗に包まれ，このドールハウスの中で唯一現存した乳児の人形が置かれている。

二層の布によって覆われた引き出し箪笥の上に茶道具のセットが置かれ，その両側に，銀製のお茶の急須とオランダの銀細工職人 Christiaan Warenberg によって作られたコーヒー沸かし器がある。四季を表現している亀甲の額縁の鏡と，壁に取り付けた四つの銀製の突き出し燭台が，この部屋の立派さを示している。

部屋の中の絵画（これも Johannes Voorhout の署名がある）は聖書のテーマを選択しているのは，出産部屋にふさわしい。暖炉の絵画は，ファラオの娘たちが枝編みのバスケットの中にモーセを見つけたというシーンで，天井の絵画は，モーセとあかしの板（十戒）が描かれている。

8）The Best Kitchen（図 8）

このドールハウスにおいて，「The Best Kitchen」と「The Cook Room」は区別された。暖炉で食事を作る部屋は伝統的に家族の主な居間でもある。小さな家だと，その部屋は人々が食事，寝室，そして一日の大部分の時間を過ごす場所となる。17 世紀に，大きな家には，食事を準備するための独立した炊事場と，食事や食器を見せるために内装された部屋が必要になった。その部屋は

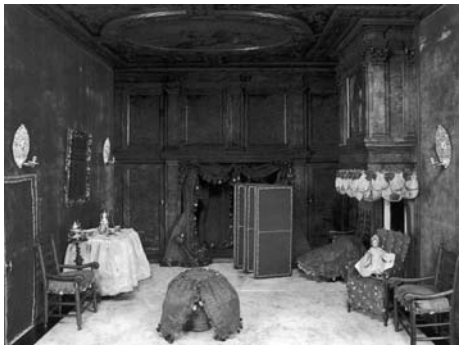

図 7　The Lying-in Room／産室

図 8　The Best Kitchen

「キッチン」と呼ばれた。

元々この「The Best Kitchen」に 3 つの人形があった。2 人の子供と，裁縫をしている子守りだった。折り畳みテーブルの上には，彼女の縫い枕，レース枕，針箱，鋏があり，裁縫の材料が入っていたバスケットは床の上にある。小さな子供はトイレ椅子の上に坐り，遊んでいた。その椅子の座面に空いてある穴の下には便器がある。

台所の天井にはドームとガラス窓の透視図が飾られていた。床から天井までの壁はタイルが貼られた。このタイルは普通のサイズであるが，より小さくタイルのように描かれ，このドールハウスが台所のために特別に注文した品であると考えられる。暖炉には，ねじれの付け柱が真ん中の花のモチーフのパネルを囲んでいるという，もう一つの飾りがある。炉の上には，彫りの銀の板と磁製の火消し壺がある。

奥の壁の一面は，すべてガラス扉付きの大きな陶磁器キャビネットである。17 世紀のオランダには陶磁器の収集が流行した。ここにあるミニチュアの陶磁器は中国と日本に注文したものであるという。下の豪華に描かれた扉の後ろには，ガラスや器を収集した。オウムの籠は，中国風に描かれた柵であり，ダイヤモンド型の黒い漆の戸の蓋は，この豪華な部屋の異国趣味を強調している。

9）The Cook Room（図 9）

このキッチンは食事の準備のみに使われていたため，素朴な部屋であり，木製の梁，白壁，モスグリーン色で塗られた食器棚から成り立っていた。料理をしていないため，炉の中には，火の変わりに黄銅の火消し壺が置かれ，その中に泥炭の余燼が消し止められた。スモークジャッキの鉤，新しい泥炭のバスケットとふいごが用意されていた。

「The Best Kitchen」がみえる窓の下に，水切り棚に，果物と干し果物が用意されていた。黄銅のハンドルと蛇口があるポンプは，以前に，流しの下にある水槽から本物の水を引き出せるようであった。ポンプの上に，台所用具は黒い板の上にかかっていた。このキッチンの一番奥にトイレがあり，その中には，穴が掘ってある板があり，その穴は蓋でふさがれていた。

17 世紀における日常道具として今日に現存しないもののいくつかがドールハウスの中にある。例えば，黄銅の桶，室内のほうき，スプーンの棚，ハンドル付きのバスケット等がある。一つのバスケットにはミニチュアのナイフと銀のフォークがあった。様々な燭台や蠟燭消しは，このドールハウスの中の物において，お互いの比例が見事に整っていることの証拠になる。銀ではなく，本来の材料で作られたことは，他の 17 世紀のドールハウスと異なる点である。

右側の壁に 5 つの水差しが板の下のフックに掛かっている。その中の 2 つは未だ蓋がついている。中国風の染付磁器にみえるが，実際にはグラスである。ゴシキヒワやカナリアの鳥籠はキッチンの中によくみられるものである。「The Best Kitchen」に導く扉の上に置いてある非常に珍しく赤い漆の皿は，扉の向こうにある東洋の宝物の予告であると考えられる。

10）The Cellar／貯蔵庫（図 10）

本物の水を汲み出すポンプ以外にも，キッチンには様々な仕掛けがある。水切り棚の端にある仕掛け扉の下に，貯蔵庫に導く階段がある。それは，キャビネットの中身の引き出しに造られた。この貯蔵庫を全て見るた

図 9　The Cook Room

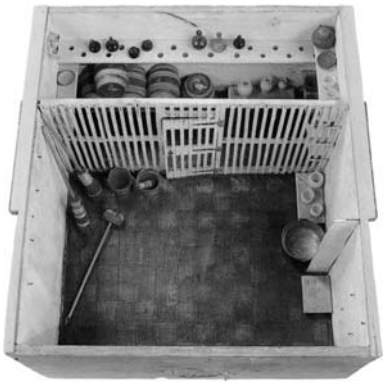

図 10　The Cellar／貯蔵庫

め，キッチンの床の半分を前に引き出さなければならない。また引き出しを出したら，覗き穴からもこの貯蔵庫がみえる。

この地味な所にも，なるべく現実を再現するような工夫がなされた。床は，茶色と緑の板石が敷いてあるように描かれ，壁は白く塗った。棚と床に置いてある簀子も元々の白い顔料で塗った。簀子は，アムステルダムの運河ハウスの貯蔵庫の湿気を含んだ床の上において，バターと他の日用品を乾燥して保存するために重要である。

ビールとワインのストックは，白い格子の背後に収められ，その扉は精細な鍵がかかっていた。ビールの樽のうち，その中の 2 つは蛇口がついている状態で並んでいる。棚の上に，ドリンクを注ぐための空き瓶があった。その中に，古い栓がかかっていることは 18 世紀の描写にも言及がある。棚の上に空いている穴は，瓶を上下逆に貯蔵するためのかもしれない。

緑・黄色，そして白いグラス製品は料理鍋，炭の火起こし器・壺・水瓶などの陶器を真似した形である。大掃除の準備に桶，長柄の磨きブラシ，二つのほうき，そして磨きが置いてある。その中の一つのほうきは使用され古びている。

11）The Tapestry Room／タペストリー室（図 11）

この部屋の名前は，壁にかかった刺繍の掛け軸に由来する。シルクの生地でまがりくねる模様を「アイルランド縫い」の技法で緑・黄色・ピンクのグラデーションの色合いに刺繍された。これは 17 世紀に使われたが，現存する作例はない。

天井と煙突には，綺麗な左右対称であるアカンサスクロールと花紋板が描かれていた。煙突の中身にある絵は，画家 Johannes Voorhout によって描かれ，キリストが小さな子供を彼に導いたという内容だった。これは間違いなく部屋の元の機能と一致していたと考えられる。亡くなった子供が部屋の中心に置かれていたということは，現在に遺されたこのドールハウスの絵からわかる。

黒い壁に独特な収集家のキャビネットがある。その中に，様々な小さな貝が収蔵され，その一部はまだ元々の状態であり，積まれたままである。このキャビネットの外部は，東洋の漆のように装飾され，その上には対である陶磁器の花瓶と瓶が置かれる。ビロード，豪華な布張りの椅子，そして，床に置かれたカーペットがこの部屋に豪華な雰囲気を与えている。

壁飾りにある扉の裏は，タペストリー室の奥の図書館である（図 12）。ここに，カーテンがかかった本棚に 84 冊，彩色の羊皮紙と革の装丁を持った小さい本がある。その多くには，彫り紙・町並み・紋章・地図と肖像画があった。教卓の上にゴルドと紫色に丁寧な装丁された 1750 年の聖書が置かれた。これは後にドールハウスに加えられた唯一のものかもしれない。

3-2. The Dolls' house of Petronella Dunois（図 13）

アムステルダム国立美術館（Rijks）のドールハウスのコレクションにある，最も古いドールハウスは確かな日付がわかる。産室にある針刺しに，1676 年と頭文字の PD（当時 26 歳の Petronella Dunois（1650-95））がある。Petronella はデン・ハーグの総督法廷の高官の娘であり，彼女は両親が亡くなった後，姉妹の Maria と一緒にアムステルダムに一緒に暮らした。二人とも様々なものを所有した。Maria もアムステルダムでもう一つのドールハウスを製作したが，現存していない。

Petronella とライデンの摂政である Pieter van Groenendijk は，1677 年に結婚した際，彼女の嫁入り道具の

図 11　The Tapestry Room／タペストリー室

図 12　The Tapestry Room／タペストリー室　書庫

図 13　The Dolls' house of Petronella Dunois/ Petronella Dunois のドールハウス

図 14　The Peat Loft／泥炭ロフト

中にドールハウスを特別に言及した。他には数多くのリネンもあった。近年，アムステルダム国立美術館は，Nicolaes Maes によって描かれた Petronella と Pieter の肖像画を収蔵した。

ドールハウスは代々家族の母系によって保存されたが，1934 年に博物館に寄付された。長い間，このドールハウスは Margaretha de Ruyter のために作られたと考えられていた。それは，彼女が似たようなキャビネットにあるドールハウスを持っているからである。

Petronella Dunois のドールハウスはキャビネットに造り付けられ，そのキャビネットは花結びと星の幾何模様を有している胡桃の寄木細工である。元々は，このキャビネットが 2 つの戸で締められるものであり，その戸には二つのガラスの窓があり，最も重要の 2 つの部屋，「産室」と「Salon・Best Room」は同じ階にある。

このドールハウスには，目録が現存している。それは 1730 年から 1740 年まで作られ，後に複写されたと考えられる。この目録から主な 17 世紀の内容は，20 個の人形が含まれ，保存されていたことがわかる。その後に，17 世紀の形にしたものと新しいものも追加され，現在は元のケースよりものが多くなっている。

1）The Peat Loft／泥炭ロフト（図 14）

泥炭ロフトは装飾になる要素は少ないが，この部屋は住宅の重要部分であるため，現存する 17 世紀のドールハウスの全てにおいて，泥炭ロフトの部屋を有している。17 世紀後半に木材の変わりで燃料として，少しずつ使われてきた泥炭がここに貯蔵された。泥炭がなければ，オランダの寒く，湿度が高い冬を乗り越えられない。

泥炭で家まで幾つかの大きなバスケットで届けられる。家の中には使用人が小さい籠で，泥炭を目的地まで運ぶ。ドールハウスの目録には，ハンドルがある籠とそれがない籠は，一つずつ記録され，二つとも現存している。そして中にはミニサイズの本物の泥炭が詰められている。この籠は黒縞の西洋の絹柳から作られた。

上のロフトの欄干に寄りかかっている面白い人形は，この家の使用人の 1 人とみられる。猫背で顔を歪めて，尖った帽子を被せ，リネンの上着と縞柄のぶかぶかのズボン，そして靴下をはいている。まるでショーから出たように。この 17 世紀の人形は，具体的に泥炭ロフトで，何をしているかは不明である。

ロフトの下にある小さな仕切りは，赤と黄色で塗られ，中に便器がある。17 世紀における保育院の家具のように，綺麗に塗った段ボール紙から造られている。

2）The Linen Room／リネン室（図 15）

棚が泥炭ロフトとリネン室を仕切っている。物干し竿があるラックからリネン室であることが分かる。古い目録から，机の後ろにある人形は，洗濯女と呼ばれてい

図 15　The Linen Room／リネン室

た。架台の上に机の板が置かれるという二つのアイロンテーブルの上に，彼女は大きな銀製のアイロンで洗濯されたリネンにアイロンを掛けている。他に，小さい折りたたみの机は 3 つがある。17 世紀と 18 世紀の家の目録の中に，机の板や架台などよく記録されているが，食卓，カードゲームの机，そして仕事台等として使用された。

銀製のリネンを収納するキャビネットから，Petronella Dunois は，このドールハウスの正確な比例にこだわっていないことが分かる。このドールハウスを作る前に，すでに，このキャビネットを所有していた可能性がある。銀製のリネンキャビネットは，銀製のおもちゃのシリーズによくみられるアイテムである。

高い翼の藤椅子は病人用の椅子である。蓋がある籠とリネンの籠には，リネンと服がいっぱいに入っている。このドールハウスには面白い服がある。シャツ・帽子，そして赤ちゃんの包み服のカバーなど，全てにレースが多く付いてある。隅にある台の上に，薄い青色のリボン，縁の白いウールの毛布が置いてある。17 世紀において原寸のサイズの毛布は現存していない。

この部屋には掃除道具もある。ブラシ・ほうき・取手付きのモップなど，このようなブラシとほうきは様々なドールハウスの中に多種があるが，その使い方は，現在では不明である。

3）Nursery／育児室（図 16）

育児室で最も豪華なものはシルクのカーテンがかかっているベッドである。そのベッドの先端はシルクと本物の羽からなる 4 つの装飾がある。これは，17 世紀の豪華なベッドの装飾に見出せる。4 つの柱の中，2 つはまだ元の装飾があり，それはこのドールハウスだけである。ベッド自体は，実際には，簡単な塗装木材，段ボール，そして紙から作られている。マットレスは，花更紗とシルク縫いのパッド入りのキルトで覆われている。同じ生地の子供用のジャケットは縫製バスケットに置いてある。

お針子は，子供達をみている。この 17 世紀の人形の服は，18 世紀になってから当時流行したインド更紗のジャケットと大きな白い帽子が添えられたため，その帽子の下に，17 世紀の帽子とゴールドヘアピンがよく保存されている。縫製バスケット・糸車・定規とハサミ（後の 3 つは銀で作られた）は，彼女の道具である。

子供部屋は 3 人の子供の人形がある。1 人は塗装段ボールの便器の上に，1 人は揺り籠に，もう 1 人は歩行器の中にある。最後の 2 人は 18 世紀に追加された。ほかに加えられたのは，3 つの組み合わせの巻き紙から造ったいぐさの椅子である。その薄い青いシルクのクッションは，ベッドの色に合わせている。

扉に，雪の風景の絵がかかっている。炉は育児室にふさわしく，銀製のストーブの囲い網が置いてある。それは火の周りに置かれ，子供に一定の距離を守るためである。

4）The Lying-in Room／産室（図 17）

子供がいない Petronella Dunois の産室には，壁とベッドはすべて更紗が飾られている。このインテリアは，現存する最も古い事例である。この鮮やかに描かれ，洗える花の綿は，17 世紀にインドからオランダに少しずつ出荷量が増えたが，その時期におけるキルトとカバーが現存したものは数少ない。そのため，この部屋は 1657 年頃に部屋の飾りとして使用された更紗の重要な例である。更紗は 18 世紀まで人気だった。

立派なフィニアルが付いた四つの柱に，その更紗は，一致する色のガロン，房飾り，そして裾に繕ってある。新しい母親はベッドで横になり，リネンシーツの下に，レースが縫い付けた 3 つの枕にもたれ掛かっている。彼女を世話しているのは，気難しい人として知られている

図 16　Nursery／育児室

図 17　The Lying-in Room／産室

野暮な顔をしている看護師だ。ワーターランドの制服を着ている子守が赤ちゃんに食べさせている。父親が赤ちゃんの見舞いに来て，目録によっては，女と男の 2 子であることがわかる。小さな男の子は裸のまま揺り籠の中に置かれ，彼の姉妹は，きちんと包まれ，乳母の膝の上に置かれている。

このドールハウスの昔の写真から，針刺しと元々の PD の頭文字は，この部屋にあることがわかる。他には，火かき棒・シャベル・ブラシ・壁の燭台二つ・水差し・盆，2 つの大きな燭台がある。1 つの良いセットの籠があり，その中に，赤ちゃんの籠，火鉢そしておくるみシートがある。屏風は最も古い目録のなかに「漆」と書かれ，恐らく 17 世紀後半に日本から購入されたものと考えられる。その装飾とモチーフの技術，そして浮き彫りの金箔は間違いなく日本のものである（後述，図 22）。

5）Salon・Best Room（図 18）

古い名前「The Best Room」から，このサロンは応接室として，最もファッショナブルな，高価な家具と美術品で飾られたことが明らかである。出産室のように，天井画が描かれ，壁は黄色のシルクが飾られてあり，床も様々な木材で化粧張りされている。その柄は幾何学と星であり，天井のパターンに呼応する。このような寄木細工の床は，17 世紀におけるオランダの家には現存せず，実際にその時に存在したかどうか疑問である。現実を反映しているかどうかにも関わらず，人形の家の「The Best Room」の床であることから，追加の装飾が加えられたことも十分に想定できる。

キャビネットと 3 つのテーブルの上部にも，オリーブの木製の星及び，ロゼットの柄がある寄木細工が施されている。キャビネットには，貴重品と，17 世紀の主婦の重要な所有物だと考えられるリネンが含まれている。テーブルクロス・ナプキン，そしてまだ何も作っていないボトルのリネンは，レース付きのクロスの上に置かれる。キャビネットの上に置いてある 18 世紀半ばの磁器は非常に珍しい。マイセン磁器の 7 ピースのガルニチュールは細かく花が描かれている。

四つの壁飾りは象牙のアップライトがついている壁ラックと 10 個の丸い黒檀のレリーフであり，17 世紀の目録に属する。その中の 8 個は，有名な皇帝の肖像であり，南ドイツの製図職人が作ったものをモデルにしたのかもしれない。象牙の上に描かれたカラーのミニチュアは 19 世紀に加えられたものだと考えられる。

Best Room には，子供 3 人と女性 2 人の人形がある。出産室を訪問するのを待っているだろうか。女性の 2 人の髪の毛は綺麗に飾られ，2 人のドレスは金と銀のレースで縫ってある。

6）Cellar／貯蔵庫（図 19）

この貯蔵庫は，沢山の食べ物が保存されている。棚の上にパイ・鶏肉，そして牛の頭を載せた皿が置いてある。オイルのボトルとハーブのグラス保存瓶が，革のカバーやオイルに浸透されたクロスで封じられている。籠の中に小さい胡桃がある。魚の干物は壁に吊ってある。

5 つの小さな樽は，縁までをバターが注がれ，その上にパターンで飾られる。これらと魚は，17 世紀の目録に記載がある。

他の 17 世紀の例は，桶・樽，そして他の容器である。塩漬けの肉は蓋のある樽の中に保存されている。透けているパーティションの後ろに銀製の蛇口がついている 1 行の樽がある。目録はワインとビールの樽を区別している。3 つのビール樽の正面に描かれたのは，白いクローバー・白鳥・ホーンである。これは実際のビール醸造所を指している可能性がある。例えば，「白鳥」の醸造所は運河シンゲルの上にあり，そこは，Petronella Dunois

図 18　Salon・Best Room／サロン・最高の部屋

図 19　Cellar／貯蔵庫

が住んだ場所である。

貯蔵庫のもう一つの良いものは，銀で造られ窓を掃除する注射器である。まず，木製のノブがついているピストンを引き上げ，バケツからきれいな水を満たした後，ノブを力強く押し下げると，水を窓並みの高さぐらいに噴出することができる。

7）The Kitchen（図 20）

Petronella Dunois の台所は，銀で完成される。壁付きの食器棚・ポンプ・煙突以外，最初に目録に言及されたのは大きな緑のクッション椅子のみである。その後，長い銀製キッチン用品のリストがある。

17 世紀の数多い銀製のおもちゃの中に，家庭用品はミニチュアとして造られた。それは，裕福な家庭の娘達のためであるとみられる。Petronella のドールハウスにも当時にあった鍋・皿・椀・ケトル，そしてほうきのミニチュアを直接に使用したと考えられる。それは，この台所の比例が精密ではない原因になった。ただし，後の Petronella Oortman のドールハウスのように，全てのミニチュアを銅や鉄で作ることは，Petronella は考えなかった。ポンプのハンドルや蛇口，焼き鳥の串，そして皿のラックとジョッキのホルダーはすべて銀製だった。その中の沢山の製品は，アムステルダムの銀細工メーカ，Wessel Jansen と Michiel Maenbeech のものである。

造られた場所は言及されていないが，沢山の物品は，実際に使用した台所の道具に由来すると考えられる。例えば，煙突のペリメットは，クッションと同じ生地のウールから作られた。木製の調理器具や斑点茶色の陶器は他の 17 世紀のドールハウスにもみられる。

1982 年にこのドールハウスが復原された際，台所の元の紙の壁は印刷されたタイルのパターンであったことが，明らかになった。

8）Dinning Room／ダイニングルーム（図 21）

台所の隣にある部屋は，古い目録の中では，ダイニングルームと呼ばれた。テーブルの上に，17 世紀の銀製の皿・火鉢・鍋・ケトルもこの名前を暗示している。目録は銀製の塩入れと調味料入れも含まれている。18 世紀に大量のガラス容器が加えられ，たとえば，17 世紀のガラスフロントの食器棚の上に置いてあるコーヒーサービスの絵が描かれた白いガラスなど，その例である。

通常には，紳士と彼の息子がワーターランドの制服を着ている農民とその息子をダイニングルームに招待するわけがない。しかし，Teunis と呼ばれる農民の息子は凧まで室内に持ち込んでいる。彼と彼の父親は食べ物を運送しに来たと考えられる。このドールハウスは事務室あるいはカウンターなど，供給員に対応する場所がないため，ダイニングルームは貿易のやり取りの現場であった。元来あったインク壺，砂の容器と蠟燭もその証拠になる。

ダイニングルームの壁は，太い黒い額縁の絵が飾られている。署名はなく，羊皮紙の上で描かれたドローイングは 2 つあり，少年と紳士の肖像画の額縁が鯨ひげで造られた。鯨ひげという美しい光沢のある素材は，17 世紀後半から黒檀の替わりに使われた。食器棚の上にある「受胎告知」の絵は，アラバスターの上に描かれている。その聖人たちの額縁は比較的単純である。このような，名家の複写で，手書きのカラー版画は，17 世紀に南オランダから大量に輸出されてきた。その中の一つはアントウェルペンの有名ではない彫物師によって署名された。

4. おわりに

ドールハウスは，ヨーロッパ各国における住宅と生活

図 20　The Kitchen／台所

図 21　Dinning Room／ダイニングルーム

の様相を理解する上で重要な資料である。それは当時における住宅の実像というよりは，製作当時に理想とされ，あるべき姿と考えられた暮らしのあり方が投影されたことが窺える。

オランダにおけるドールハウスには，1）ロフト，2）リネンルーム，3）育児室，4）産室，5）サロン，6）キッチンが共通して製作された。この6つの部屋は，当時の女性の住まいにおいて重要な空間として認識されていたことが分かる。

ドールハウスの各々の部屋のつながりは，現実の建築構成を背景に連結された。ロフトやリネン室は，上段に配されたが，実際にこれらの部屋は，屋根裏に存在した。

サロンや産室は，ドールハウスの中央に置かれた。サロンは，フランスから移入した文化であり，女性が中心となる公的な空間であった。いっぽう，産室は，出産が危険を伴う時代であり，当時の女性に託された役割として，重要な部屋であったと考えられる。

本稿で紹介した2つのドールハウスには，東洋趣味が示されている。漆のティーテーブル・陶磁器・金のスクリーン・屏風等が製作された。これらは，当時のオランダにおける東洋趣味を理解する上で重要な資料となる。とりわけ，Petronella Dunois のドールハウスのサロンに置かれた屏風は，日本から輸出された屏風を模倣することで製作されたと考えられる（図22）。花と邸の縮尺が統一されていない点などに，日本で制作された絵画とは考えにくい。邸内に畳を敷き詰めた部屋が描かれ，物語絵を基にした可能性が高いが，人物が描かれず，留守文様風の表現になっている。本屏風は，オランダに伝来した日本の屏風を示唆するものとして貴重である。さらに，オランダ国内のドールハウスには，実際に日本の物語絵を基に製作した屏風が置かれており，別稿で紹介したい[9]。

主な参考文献

1）後藤久『西洋住居史』彰国社，2005年においても，西洋住居史の資料としてドールハウスが紹介される。また，オランダ商館長等が製作した日本の町屋模型がライデン国立民族学博物館に所蔵される。野口賢治・波多野純「ライデン国立民族学博物館所蔵の町屋模型について」日本建築学会学術講演梗概集，2007年（F-2）等がある。

2）2011年5月～7月，オランダライデン国立民族学博物館に滞在し，オランダ国内のドールハウスを実見する機会を得た。この際にマティ・フォラー氏，フォラー邦子氏にご教示を得た。

3）NHK「ハイビジョン特集新発見大坂図屏風の謎～オーストリアの古城に眠る秀吉の夢～」2009年等で紹介された。

4）『BIOMBO 屏風日本の美』サントリー美術館，2009年。

5）本カタログは，2013年～2015年生活科学部人間生活学科応用演習Ⅱ（住文化）において，ゼミ生が分担して翻訳した。兼田美咲（2014年度卒業生）は，卒業論文としてとりあげた。第2章は兼田美咲の成果を基にする（兼田美咲『ヨーロッパにおける DOLL HOUSE－室内意匠にみる中国・日本の影響』同志社女子大学生活科学部2014年度卒業論文）。第3章からの翻訳については，Yang Yu にご助力いただいた。

6）フェイス・イートン『世界一くわしいドールハウス大図鑑』日本ヴォーク社，1995年，堀江幸男

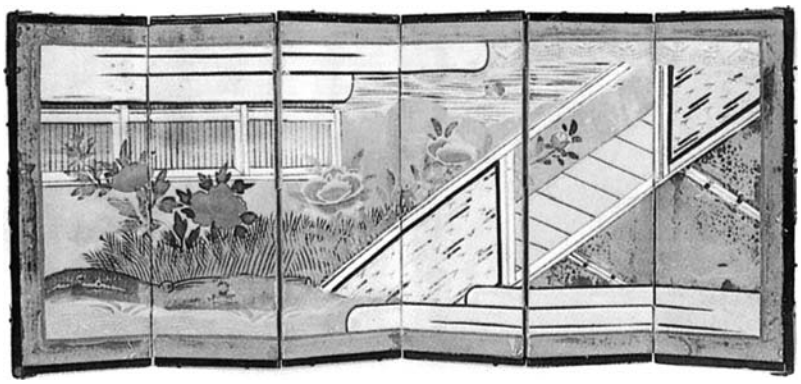

図22　The Lying-in Room／産室　屏風

・大島みどり『レッスンシリーズアンティーク・ドールハウスドールハウス図鑑』共同製本，2001年，新美康明『ドールズハウスミニチュア世界の扉を開く』新樹社，2012年等を参考にした。

7）『QUEEN MARY'S DOLL'S HOUSE OFFCIAL GUIDEBOOK』ROYAL COLLECTION PUBLICATIONS, 2009年

8）『Doll's houses of the Rijksmuseum』Rijksmuseum, 2007年
The 17th-century dolls'houses of the Rijksmuseum is a coproduction of Inmerc BV in Wormer and the Rijksmuseum Foundation in Amsterdam, Text : Jet Pijzel-Dommisse, Translation : Patricia Wardle, Photography : Margareta Svensson

9）オランダにおける美術館に所蔵される主要なドールハウスとして，ティラー博物館（ハーレム），フランスハルス博物館（ハーレム），ハーグ中央博物館，ユトレヒト市立博物館，ドルドレヒト博物館がある。特に，フランスハルス博物館（ハーレム）には，日本の物語絵屏風が立てられており，別稿で紹介したい。本論文は，注8）の図録より図版を引用させていただいた。

（2015年11月6日受理）